

冷戦期におけるデュボイスの反戦活動とアメリカ政府による思想統制

東海大学 本田量久

アメリカ黒人社会学者 W.E.B. デュボイス (1868 ~ 1963 年) は、『フィラデルフィアの黒人』(1897 年) や『黒人のたましい』(1903 年) などにおいて、奴隷制の過去と結びついた白人中心的な「合法的カーストシステム」を社会学的に明らかにした。さらには 1910 年代から 1940 年代にかけて、『黒人』(1915 年)、『肌の色と民主主義』(1945 年)、『世界とアフリカ』(1946 年)などを刊行するなど、アメリカ国内の人種問題に限定されない、人種主義や植民地支配に基づく欧米中心的な世界秩序にもデュボイスの関心は広がっていった。マルクスの影響を強く受けたデュボイスは、安価な労働力と天然資源を搾取し、収益を最大かするという欧米諸国の資本主義的動機こそが奴隷制や植民地支配の土台となっていると分析し、社会主義に基づく新たな世界秩序を主張した。

このような思想的な背景から、デュボイスは学者として活躍するのみならず、人種差別や植民地支配の解決を訴える運動においても指導的役割を積極的に引き受けた。1909 年、公民権団体 NAACP 創設において中心的役割を担い、機関紙『危機』を通じて黒人知識人とともにアメリカ人種問題の解決を訴えた。また、ロンドンで汎アフリカ会議が開催された 1900 年以降、海外の汎アフリカ主義者と連携しながら、欧米中心的な世界秩序を批判するとともに、アフリカの自己決定やアフリカ系の民主的諸権利を実現すべく、5 回にわたる汎アフリカ議会 (1919、1921、1923、1927、1945 年) の開催に関わった。

デュボイスが汎アフリカ主義に積極的に関与した動機には、欧米諸国による植民地拡張競争がもたらした世界規模の戦争を繰り返さないという目標も含まれていた。第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和会議に合わせて、パリで第 1 回汎アフリカ会議を開催し、欧米諸国の政府関係者に植民地支配の根本的解決を訴えた。しかし、ヴェルサイユ講和会議は日本が求めた人種差別撤廃決議を却下し、その後に創設された国際連盟も人種差別や植民地支配をめぐる解決を回避した。結局、戦争の原因は除去されないまま、第二次世界大戦へと連なっていった。デュボイスは、1945 年 4 月のサンフランシスコ会議に出席し、同様の主張をしたが、その後に創設された国際連合も実質的な成果をもたらさなかった。

デュボイスは、冷戦イデオロギー対立が深刻化する時代状況において、世界中の平和団体や著名な平和活動家と連携しながら、欧米中心的な世界秩序を批判する活動を展開し、1950 年に平和情報センターを創設した。その結果、アメリカ政府やメディアをはじめとする各方面から厳しい非難を招き、1951 年に共産主義とのつながりを疑われて外国エージェント登録法違反容疑で逮捕された。

デュボイスが著した『平和のための闘い』(1952 年刊行) は、(1) 人種差別、植民地支配、戦争を通じて構築された欧米中心的な世界秩序に関する社会学的な分析とともに、(2) デュボイスが国内外で展開した反戦活動を示す一方、(3) デュボイスに対するアメリカ政府の弾圧を克明に描いている。本報告では、『平和のための闘い』などの著作を踏まえながら、冷戦期アメリカによる思想統制の実態について論じてみたい。